公益財団法人 福武教育文化振興財団 機関誌「不易」vol.54

FUEKI

［特集］「ここに生きる、ここで創る」―地域を紡ぐ、モノづくり―

［活動リポート］地域の宝を育む

特集

福武教育文化振興財団フォーラムvol.03 「ここに生きる、ここで創る」

―地域を紡ぐ、モノづくり―

チーズ職人、酪農家 吉田全作 氏

染織作家 加納容子 氏

家具職人 大島正幸 氏

コーディネーター 山川隆之 氏

Photo by ; Daisuke Aochi

吉田全作 ―― Zensaku Yoshida

1955年岡山県岡山市生まれ。北海道大学農学部畜産学科卒業。1984年吉備中央町に「吉田牧場」を開業。土地に根ざし牛を放牧し、飼や牧草にこだわり、おいしい乳を搾り、独学で究極のチーズを作り続け30年。全国に多くのファンを持ち、有名レストランの一流シェフたちからは絶賛され、入手の困難さから"幻のチーズ"と呼ばれている。2007年（第8回）福武文化賞。

福武教育文化振興財団では、創造的な地域づくりをみんなで考える場として「ここに生きる、ここで創る」フォーラムを開催しています。今回は住んでいる土地の自然や風土、歴史、人や文化などを紡いでモノづくりに取り組んでいる吉田全作氏（チーズ職人、酪農家）、加納容子氏（染織作家）、大島正幸氏（家具職人）に「モノづくりと地域づくり」についてそれぞれの想いを語っていただきました。（1月13日ルネスホールにて）

▼その土地を選んだ理由について

吉田――北海道でするつもりだったが、いろいろな事情で岡山に。岡山は中国地方で一番乳牛の数が多いのですが、それすら知らなかった。たまたま岡山県の真ん中（吉備中央町）に、まとまった土地が売りに出ていて、故郷岡山で酪農ができるのだったらと、最初は軽い気持ちだった。

山川――吉備中央町でなければならない、ということではなかった？

吉田――全く違います。僕がその土地に合わせていきます。当時は広いところの方がいいだろうということと、僕は北海道にあこがれていて、北海道でないといやだと思っていた。しかし荒地を利用して牛を飼い、そこの土地の草を食べて、その土地の乳を出すという、そういうことが自然だと思うようになった。

山川――加納さんは学生時代に東京に出られていて、勝山に戻るという、Uターンの選択だったと思うのですが…

加納――当時は東京で機織りを教えている生徒もたくさんいて、楽しくやっていたから帰りたくなかった。酒屋（実家）の大変さは幼少の頃からよく見知っていたので、あーまた二の舞になるのかなと悩んでいたとき、御前酒蔵元辻本店を継いでいた幼馴染の「うちの酒を売ってくれや」という言葉がきっかけで、何となくその気になった。

勝山には自然がたくさんある。山にも登れる。川原にもいろんな植物が生えている。こんな東京で植物を買って染めるのではなくて、自分が採ったもので染めることができるということが私にとって一番の魅力だったのかもしれません。

山川――大島さんは岡山とは縁もゆかりもなく、西粟倉の森に魅せられて関東から移り住まれた。場所を決めたポイントは何ですか？

大島――森づくりのビジョン「百年の森林構想」が一番のポイント。家具職人が一生懸命作ろうと思えば思うほど工房から出なくなって、森のことが全くわからなくなる。その点、「百年の森林構想」は森との距離が近くて見えやすい。そこに魅かれた。

山川――関東圏と文化が違う西日本の、しかも岡山の最も山の奥の方で、そういうことに対する難しさ、抵抗感はなかったですか？

大島――「百年の森林構想」の話を聞いて、いい家具を作って振り向いたらいい風景があるかもしれない。そう思ったら夢中になってしまって、次の日に辞表を出してしまったぐらい。不安を感じる前に辞表を出していた。出した後に不安を感じた（笑）。

▼土地の魅力

山川――自分が作るものに対して、住んでいる土地が与えてくれる魅力、力といったものはあるのでしょうか？

加納――勝山に帰ってきて初めてヒノキの皮というものに出会った。帰った頃はまだ勝山にも製材所がたくさんあって、乾燥機からはヒノキのいい匂いがわーっと漂ってきた。捨てられていたたくさんのヒノキの皮を見て、本にはそんなにヒノキの皮は染まらないと書いてあったけれど、やってみようと思って染めてみた。今日の着物は、全部ヒノキの木の皮で染めて織ったもの。こげ茶もグレーも、ベージュも本当に優しい色が出ます。

直島の「本村のれんプロジェクト」に携わらせていただいたり、出雲大社遷宮60年で撤去された御本殿の大屋根檜皮（ひわだ）を煮出して染めをさせていただいたり、勝山のヒノキと出会って大きな広がりをいただきました。

山川――チーズはそれぞれ土地によって違いがありますか？

吉田――チーズはフランスが一番有名。フランスには1000も2000もチーズの種類があると言われますが、作り方でいえばだいたい5種類ぐらい。なぜ2000も3000もあるかと言うと、同じ村でも、土地や作り手が違えば味が微妙に違うから。ワインと同じ。土地に生える草の味が違う、養分も違う、

加納容子 ―― Yoko Kano

1947年岡山県勝山生まれ。女子美術短期大学デザイン科、生活美術科卒業。29歳で勝山にUターン。1996年に勝山町並み保存地区にて、のれん制作開始。翌年、生家にて「ひのき草木染織工房」を立ち上げる。2001年直島「スタンダード」展の関連企画として「本村のれんプロジェクト」に携わる。NPO法人勝山・町並み委員会理事。NPO法人として2008年（第9回）福武文化賞。

大島正幸 ——— Masayuki Oshima

1980年栃木県生まれ。金沢工業大学建築学部卒業。森林再生に取り組む西粟倉村の事業に共鳴して移住。無垢の素材、伝統的な木組みの技術を活かしつつ、現代の暮らしにあったものを作り出すよう心がける家具工房「木工房ようび」を開設。西粟倉村では、家具にはあまり用いられてこなかったヒノキに着目し、ヒノキで家具を作るという新しい文化を確立。2013年（第14回）福武文化奨励賞。

空気が違う、チーズや牛乳に入る細菌が違うので、微妙に味が違って、その土地の味が出る。

僕のコントロールできる範囲は少なくて、土地の力や風土に大きく左右される。食品というものはそういうものだと思っている。今、作られているモノはほとんど工場生産で、均一化することに重きを置いている。季節によっても味が違い、牛の体調によっても味が違うというようなものは、なくなってきている気がする。

山川——自分の作る家具がその土地の力によって引き出されると感じられることはありますか?

大島——一緒に暮らしていたトビ職人だった祖父の影響で家具職人の道へ。祖父と同じ職人であることをすごく誇りに思って生きてきたが、自分は職人ではなく加工者ということに気づいた。

西粟倉村に来るまでの7年間は、山のことや川のこと、そして土壌のことをあまり考えたことがなかった。土地を見てなかった。つまり、思いはあっても図面と素材をみて作る加工者だった。

職人は、山を育ててくれる人たちのことを十分理解したうえで、素材を生かしたうえで、次の人にバトンを渡していくということをしなければならない。

山川——実際に森の木の世話を大島さん自身がされるのですか?

大島——森が荒れていることを家具職人自体がほとんど知らない。お金を出せば買えるというイメージ。私自身、教科書の勉強をしてきたので、森の現状を知らなくて恥ずかしい次第。

このままだと無責任だと思って去年、会社で山を買ってちょっとだけ始めている。本格的に山のことを知るために、74歳の大先輩、吉田さんに教えてもらいながら、覚えています。

山川——実際、木を育てて切って出してというところから家具作りは始める?

大島——今はまだできてないが、仲間と一緒にそこまで準備していきたいと思っている。近い将来、「今日山行くべー」と言っていけるようにしたい。

▼地域とモノづくりのこれから

加納——私の夢は、勝山の町がモノづくりの町になって、小学生が歩いて学校から帰る時に、おじさんなんかがモノを作っていて、こういう人生もあるって、こうやって楽しく生きている人がいるということを子どもたちに知ってもらいたい。モノを作ることがいかに大事かということを子どもたちが体得していく町になればいいなと。

モノづくりというものに対する幅を大きく広げて、みんながそれに対して共有できる感情を持っていくということが大事ではないかと思っている。皆さんの中で勝山に行って見てモノを作ってみてもいいよと思う方がありましたら、是非ご一報ください。後押しを一生懸命させていただきます。

大島—— 100年の森林構想があと45年で終わる。50年後終わったときにきれいな森ができるかなと。次の問題はその森をどうするか。そこで一番活躍できる職人を育てなければと思っている。

これからは、森や自分たちのやっていることをわかりやすく噛み砕いて可視化して、来てもらうべき人に来てもらう。そのために迎えられる体制を整えつつ、きちんとシンプルに行動していく。

きれいな森にすると約束しましたので、弟子をとって職人を育てていくのは僕の責任だと思う。同じ志を持つ仲間や家族でやっていきたいなと。

西粟倉村は自然が豊かなので、エネルギーあふれる人が増えて、村内でいろいろなことがやれればと思っている。

吉田——もっと地元の人にうちのチーズを食べてもらいたい。全町民とは言いわないけど、食べてもらえたら認めてもらえるんじゃないかと。

後は、牛が健康でお乳がでて、僕らも健康で生きていけたらいいな。

言うまでもなく、ものづくりと地域は密接な関係にある。自然や風土、そして人間関係……なかでもコミュニティのあり方は、プラスになることもあれば、マイナスになることもある。地域に根ざしたものづくりは、新たなコミュニティの形成につながり、地域をより豊かなものにする可能性を秘めている。今回の3人のお話を伺いながら、そのことを改めて強く感じた。（山川）

※今回のフォーラムでは、吉田牧場のチーズをはじめパン屋タルマーリー（真庭市）のパン、難波邸フレル食堂（美作市）のジビエ料理が参加者に提供されました。

山川隆之 ——— Takayuki Yamakawa

編集者／吉備人出版代表
1955年岡山県岡山市生まれ。三重大学農学部卒業。地域に根ざし、地域を掘り起こす本づくりを目指し1995年吉備人出版設立。これまでに約460点を出版。そのジャンルは、歴史や文化、社会をはじめ自然科学、生活・家庭、教育、芸術、社史など幅広く手掛けている。2012年（第13回）福武文化奨励賞。

活動リポート

地域の宝を育む

未来を創る子どもたちは私たちの希望です。大切に育てていかなければなりません。しかし、社会の動きに敏感で、多くの影響を受けるのもまた、子どもたちです。財団では子どもたちの健全育成に様々な取り組みをしている団体を応援しています。その中でも「子どもは地域の宝」として地道な子育て活動を行っている2つの団体を紹介します。（財団・平山）

「公民館を子どもたちの居場所に」 ― 寺子屋「高松」

（平成25年度教育研究助成）

月2回土曜日の朝、通学バックに学習用具を入れて小学生がやって来きます。ヘルメットをかぶって自転車で来る子、母親に送ってもらう兄弟、友だち同士でおしゃべりしながらで賑やかに来る子もいます。中学生はほとんどが自転車でやって来ます。

ここは豊臣秀吉の高松城水攻めの史跡が立つ岡山市北区高松。田園地帯の中にある高松公民館。子どもを迎えるのは「公民館を子どもたちの居場所にしたい」との思いから、一昨年10月にこの寺子屋「高松」を立ち上げた西村洋子館長と、その思いに賛同したボランティアの寺子屋先生（教職員OB）たちです。

学習の支援活動では、寺子屋先生たちは決して先に口を出すことはありません。子どもの方から尋ねられれば、一緒に考えます。教えてやろうということはなく、あくまでもそばで見守ります。子どもたちが学習の力だけでなく、自主性や大人と話をすることで、言葉遣いや、礼儀など、社会で生きていく上での力を少しでも身につけてくれたらいいという思いがあります。

「ここでは、学校とは別の方法で子どもと関われます。責任はありますが、地域の人間が地域の子どもを育てていく、これは大人にとっても大変幸せなことですよ。もっと参加者が増えるようにして、ずっと、続けたいですね」と、公民館の講座生でもある寺子屋先生の三垣昌章さん。

「家で何もすることなく、テレビを見たりゲームをしたりする時間があったら来てみて欲しいですね。何かのきっかけにはなると思います。子どもたちが、ここにきて、居心地が良く、それでいて友だちも沢山できて、大学生や、あるいは大人になっても、休みなどにちょっと寄ってくれて、面倒を見てくれる、そんな世代交代をしながら長く続いてくれると嬉しいです。それが結局、人と人や地域のつながりが強く、太くなることですから。」と西村館長。

最近は中学生に勉強を教える高校生の姿が見られるという。

西村館長の言葉から、「地域の宝」をみんなで育てる、という熱い思いが伝わってきました。

子どもたちの居場所づくり ― NPO法人「タップ」

（平成25年度谷口澄夫教育奨励賞）

「タップ」の活動は多岐にわたっており、子どもたちにかかわることだけでも、「毎日の放課後の居場所 學び家」、「学びのサポート」、「文化普及」、「ジュニアリーダーの養成」、「登校支援や個別相談活動」などがあります。その活動は常に「親と子どもに安心と笑顔を」というコンセプトに基づいて取り組まれています。すべて「子どもの幸せ」へつながる活動です。

毎日放課後になると、近くの小学校から子どもたちが帰ってきます。「ただいま」、「おかえり」。現在、ここ「南輝子どもステーション」に通ってくる子は60人余り。土日や、長期休業中には中学生も加わることもあります。

「学びのサポート」では毎日の放課後宿題教室と週1度の「寺子屋勉強会」。基礎基本の学習をしっかり定着できるよう、必ず、毎日の宿題はきっちり仕上げさせ、また、寺子屋勉強会ではスタッフが学習支援を行います。ボランティア大学生のサポートもあります。

「文化普及活動」は絵手紙、将棋、書道をしています。また、ダブルダッチ＆ダンス、スペシャルけん玉、スペシャルダンスを取り入れ、人との関わりをとおして、ルールやマナーを守ること、工夫や協力の大切さを知らせ、楽しさや悔しさを味わわせることで、体力づくりや技術向上だけでなく豊かな人格形成を目指しています。いろいろな大会への出場も子どもたちの励みになっています。異年齢の子どもたちが学校とは違う場、集団の中で関わり合うことをとおして、リーダーシップやフォロアーシップを身につけ、助け合い、信頼、憧れ、自己の存在感を味わう。ここは、そんな子どもたちの居場所となっています。

代表の古谷さんは言います。「社会の情勢や親の価値観がだんだん変わってきていますが、どんな状況においても親と子に安心と笑顔を作っていくことを目指しています。ここの場所が地域の子どもたちが自由に集い、仲間がいて、遊び、話し、けんかして、コミュニケーションが広がり、さらには学びへのつながりがある<総合的な居場所>になればいい、そこからまた、大人へ、地域へと広がって、豊かで生き生きとした地域になるきっかけになればいい、そんなふうに願っています」

ここにも「子どもたちを宝物」として大切に育んでいる人達がいます。

近年、日本では海外に留学する若者が減少しており、国においても留学生の倍増計画やグローバルハイスクールの指定など、若者を対象としたグローバル人材育成のための施策が打ち出されています。このような時代の背景を受け、当財団でも岡山県の学生・生徒にグローバルな意識を持ってもらおうと、毎年オーストラリアTAFEへのプレ体験留学を行っています。

今回は2009年にプレ体験留学へ参加し、高校卒業後オーストラリアへ留学を決め、TAFEを卒業した岩崎貴大さんとお父様の岩崎耕造さんにお話しを伺いました。（財団・植月）

父と息子 留学を語る

Father and Son, Talk about the abroad

私でもできる

息子・岩崎貴大さん

留学は両親の勧め

高校時代、私は特に夢もなく、就きたい職業もなく、ただ部活や友達と会うのが楽しいだけの高校生でした。そんな私にオーストラリア留学を勧めたのは両親でした。正直最初は留学へ対する強い思いがあったわけではありません。しかし留学について説明を受けるうちに、将来を考える一つの方向的にいいかもしれないと思うようになり、まずはプレ体験留学への参加を決めました。

プレ体験留学では、TAFEでどのような資格を取得できるのか、また、オーストラリアの生活はどのようなものなのかを身をもって知ることができました。実際にカレッジを回り、そこで学ぶ多様な国籍の学生を目の当たりにしたとき「留学しても一人じゃないんだ」と安心し、同時に「私でもできるのではないか」と考え始めオーストラリア留学を決意しました。私にとってプレ体験留学は、将来を考えるうえで実際に海外へ目を向けるきっかけとなったのです。

将来は必ずオーストラリアへ

オーストラリアでは9か月間TELCへ通い、その後TAFEで2年半グラフィックデザインを学びました。その間、いろんな国籍の友達ができたのが一番良かったことです。私はもともと内気な性格でしたが、人と話したり関わりを持つことが好きになったのもオーストラリアのフレンドリーで大らかな雰囲気のおかげだと思っています。

今は帰国し、岡山市内のデザイン会社に勤務しています。仕事をする上でのスキルはもちろんですが、同僚や上司へも自分の意見をはっきり伝えようとするところはTAFEやオーストラリアでの生活で身についた力だと思います。

将来はTAFEで学んだ知識を使って日本で経験を積み、その後必ずオーストラリアへ戻り、オーストラリアで就職することが今の私の目標です。

留学させた親の想い

父・岩崎耕造さん

海外へ向かってレールを引こう

息子の留学について、私は大いに賛成でした。というのも、私は仕事で海外へ行くことが多かったので、留学ということにさほど大きな壁は感じていなかったのです。むしろ、これからの時代は日本人も積極的に海外へ進出し、世界をまたぐような仕事をしていかなければならないと思っていました。

わが家は息子が小学生の頃にタイ人の留学生のホストファミリーになった経験があります。1年間でしたが、彼女は私たち家族の一員となり、日常生活から日本の文化や生活・言語を学びました。帰国する頃の彼女の成長ぶりは素晴らしく、もし息子も親元を離れ海外留学したら、一回りも二回りも大きく成長してくれるのではないかと期待しました。そこで私たちは息子が「世界で活躍したい」と思えるような、海外へ目を向けられるような機会を作ろうと決意したのです。

自分の人生を決めるための留学

海外留学をサポートする企業はたくさんありました。息子を連れ、大阪などへも説明会へ出向きましたが、とりわけ私はGCAの創立者である福武總一郎さんのお話に感銘を受けました。「これからの時代を生きる若者は、世界に通用する確かなスキルを身に付けなければならない」という、そのポリシーが私の思いと合致したからです。

息子はオーストラリアで約4年間の留学を終え帰国しました。留学前は何事にも消極的でおとなしいだけの子どもでしたが、今の息子は自分の意見をはっきり言えて自信に満ちています。親に頼らず、ひとりでたくましく生きてきた成果だと感じております。このように成長したわが子を見ると、この選択は間違っていなかったと確信しております。

すべてはプレ体験留学から始まりました。彼にとってプレ体験留学での経験は、本当に自分は海外でやっていけるのかどうかを判断する最高の機会になったのです。

当財団では今年も8月にプレ体験留学を予定しています。また、昨年度のプレ体験留学をまとめた報告書もあります。詳しくは財団事務局までお問い合わせください。

「語学留学にとどまらない留学」について、考えるきっかけになるのではないでしょうか。

※TAFE（テイフ）：オーストラリア州政府が運営する公立総合高等職業教育機関。多様な専攻コースがあり、「実践的な教育」が重視された指導内容で各業界の第一線で活躍する人が指導する。資格取得後は大学へ編入も可能。

※ベネッセGCA（グローバルキャリアアカデミー）：ベネッセがシドニーに設置している留学生をサポートする機関。日本人スタッフが常駐し留学生の生活全般をサポート。保護者には定期的に様子を伝えている。

※TELC（テルク）：TAFE附属の英語学校。英語圏外からの留学生にTAFEで学ぶために必要な英語力を身に付けるための学校。日本からの留学生のほとんどがここで学び英語力を付ける。

「瀬戸内国際芸術祭2016」開催決定

昨年延107万人が来場した**瀬戸内国際芸術祭2013**。島々は賑わいました。そして、これまでの2回の芸術祭の経験を活かして瀬戸内の海と島々を活性化し、地域全体の発展にもつなげていくため、2016年に第3回の瀬戸内国際芸術祭を開催することが瀬戸内国際芸術祭実行委員会により決まりました。本年度中に策定される基本計画で、開催コンセプトや会期、会場、作品等が明らかになるとのことです。次第に具体化していく世界最大級のアートイベントは2年後です。ご期待ください。

この芸術祭の特色は、閉幕後も作品が残り蓄積していくことです。芸術祭2013で展示された207点の作品のうち、97作品が継続して展示され、12の島と2つの港を訪れる人々を迎えています。瀬戸内を、いつでも人々が訪れる場所にするために、3年ごとの芸術祭だけでなく、その間も「ART SETOUCHI」が開催されます。開催時期や作品などについては、公式ウエブサイト http://setouchi.artfest.jp でご確認ください。
あなたも「母なる海へ、アートを巡る旅」に出かけてみませんか。

瀬戸内国際芸術祭2013に合わせて開館したベネッセアートサイト直島の施設。通年開館している。
http://www.benesse-artsite.jp/

豊島横尾館　写真：山本糾
Teshima Yokoo House　photo:Tadasu Yamamoto

「I邸」に新作登場

犬島「家プロジェクト」では、「瀬戸内国際芸術祭2016」に向けて、段階的に展示替えが行われる予定です。第1弾として「I邸」において、大阪出身の若手作家・小牟田悠介氏の作品「プレーンミラー」「リバース」が公開されています。作品によって、内と外が融合する風景をお楽しみください。

左：犬島「家プロジェクト」I邸外観（提供：妹島和世建築設計事務所）
右：小牟田悠介「プレーンミラー」作品イメージ

平成26年度の事業計画

平成26年3月8日、平成25年度の補正予算及び平成26年度の事業計画について理事会・評議員会を開催しました。

初めに、当財団の福武總一郎理事長（写真）が「公益財団法人に移行して2年経過し、透明性の高い財団運営に配慮しつつ、岡山県内の教育文化の課題解決を図るべく努力をしている。特に岡山県の児童生徒の学力低下問題については、地域の教育力を上げることが非常に重要と考え、財団として更なる支援をしていきたい。」と今後の方針について語りました。

平成26年度からは、県内の教育文化振興に大学等高等教育機関の知識と人財を活かすために大学等との連携を深めるなど、新たな事業を加えた事業計画が次のとおり決定しました。

教育文化活動支援事業

Ⅰ　表彰事業

◎福武哲彦教育賞・谷口澄夫教育奨励賞
岡山県の教育研究、実践に顕著な業績を上げている個人・団体及び今後が期待される個人・団体を顕彰する。特に教育を通じた地域振興への貢献を重視する。

◎福武文化賞・福武文化奨励賞
岡山県の文化の向上に大きく貢献した個人・団体及び今後が期待される個人・団体を顕彰する。奨励賞では若者の文化活動を通じた地域振興への貢献を重視する。

Ⅱ　助成事業

教育関連助成

◎教育研究助成（公募）
今年度は「学校や地域で行う学力向上の取り組み」と「グローバル意識を持つ子どもの育成活動」に加え、新たに「大学・短期大学が地域と連携して行う活動（※）」に助成。
（※）岡山県や市町村の抱える教育課題を前提とし、これを解決するための調査、研究及び実践
テーマ①　行政、学校、地域、家庭が連携した学力向上の方法
テーマ②　幼児期から小学校低学年までの健全な成長に必要な地域や家庭の対応

◎特定教育助成
今日的教育課題について実践的かつ先進的な研究を行っている教育団体等に助成。

◎学力・人間力育成推進事業助成
学校の教育力・教師の力量並びに地域の教育力の強化を通じて児童・生徒の学力・人間力の豊かな育成を図る研究・実践事業に助成。

文化関連助成

◎文化活動助成（公募）
文化芸術による地域の活性化を目指す活動に助成。今年度は、大学等が地域文化振興を目的として地域と連携して行う研究、実践活動を積極的に支援する。

◎特定文化助成
主要文化団体の活動に助成。今年度から新たに「『岡山の文化財』発刊プロジェクト」に対して3年継続で助成。

◎瀬戸内文化育成助成
瀬戸内文化の育成、創出のために必要なプロジェクトに助成。

Ⅲ　研修会等開催事業

◎小学校教員英語研修
小学校教員の英会話能力を向上させるために集中的な研修を、テレビ会議システムで行う。

◎研修会・講演会開催
教育文化振興のための研修会、講演会を行う。

Ⅳ　「海の劇場」事業

「学校で開く舞台芸術講座」の実施と創造的な舞台芸術公演を岡山市内で主催する。

国際的人材育成事業

Ⅰ　海外教育調査研究・研修事業

教師と若者（主として高校生）をオーストラリアに派遣し、先進的な教育制度や留学生支援体制を体感させて、若者が国際化社会の中で世界に目を広げ、自らスキルを高めるための選択肢を提示する。

Ⅱ　日中青年交流研修事業

岡山県の高校生が中国に訪問交流し、学校授業や行事、ホームステイ等を通じて相互理解と友好を深める事業に助成。

Cover Photograph

Monochrome Bird　青地大輔

私が写真をはじめた頃は、まだフィルム全盛で、デジタルカメラというものは存在していなかった。ちょうど社会人になったぐらいのタイミングにデジタル一眼レフが世の中に姿をあらわしてきたと思う。そして10年もたたないうちにフィルムは衰退し、デジタルに変わり、多くの人が写真を気軽に楽しめるように変化した。しかし、気軽になった一方で、1カットに込める思いというものが軽視される傾向にある。いくらでも撮れて不要なものは簡単に消せるデジタルでもフィルムの時と同じように1シャッターに込める思いというものは変わらず大切にしたいものだ。

今年は、自身にとっては珍しく新年早々後楽園で丹頂を見ていた。私が見ていたのは全体のフォルムではなく広げたツバサの部分だ。首から先が写り込んでないことで違和感を持たれる方もいるかもしれないが、よく考えてほしい。この姿は何かに似てないだろうか。サモトラキで発掘されたニケの女神像だ。体の一部がなくなった状態で展示されているにもかかわらず、不完全な形ではあるが鑑賞者に完全な美について考えさせてくれている。リニューアルした不易の横に白紙を置き各々が思うその続きを創造し描いてみるのはどうだろうか。

あおちだいすけ／写真家、ブルーワークス PHOTO & DESIGN Office 代表、犬島時間実行委員会代表。1973年岡山市生まれ。写真及びデザイン業を営むとともに2004年よりアートを通じ、コミュニケーションを図ることを目的としたプロジェクト「犬島時間」を企画主催。人材の育成と発掘・地域づくりに取り組む。2013年福武文化奨励賞、岡山市文化奨励賞受賞。

Editor's Comments

不易流行　～変わらぬ思いと変わる姿～

私たちは、この財団機関誌「不易」を毎号のテーマに沿って取材してきましたが、取材を深めれば深めるほど、それを表現できないもどかしさを感じていました。教育文化の活動や現象のご紹介だけではなく、それに携わる人の情熱や暮らし、さらに地域から見た視点まで掘り下げなければならないと。

このため今回から、発行回数を年3回としてページを増やすことにしました。県内で行われている様々な活動の「皮膚」だけでなく、「筋肉」や「血管」できれば「骨」まで、少しでも感じていただける内容にしたいと思っています。

また、タイトルが「いかにも堅そうでとっつきにくい」とのご指摘もあり、何だろうと多くの人々に手に取っていただけるように「FUEKI」としましたが、「不易」の思想はきちんと表現し、保ち続けたいと考えています。

財団の目的は、岡山県内で教育文化に携わる人々の活動を応援して、地域を振興発展させることにあります。福武理事長の言葉をお借りすれば、それぞれの地域で「人々が幸せになれる、いいコミュニティづくり」（お年寄りの笑顔があふれる社会づくり）です。

昨年7月、17歳のマララ・ユスフザイさんは、世界の子どもや女性が等しく教育を受ける権利を求め国連で演説をしましたが、「1人の子ども、1人の教師、1冊の本、1本のペンが世界を変える」との言葉で終わりました。私はこれを熱い思いを持って教育文化に携わる人々への応援メッセージでもあると受け取っています。

今、地域には多くの課題があります。しかし、教育と文化の力は、地域や国、世界を変えることができるのだと信じています。（財団・中野）

機関誌 不易　FUEKI　vol.54　2014.5.25

題名「不易」には、「時代を超えて優れたものに共通する本質的なもの」を大切にしたいという谷口澄夫初代理事長の思いが込められています。

編集・発行：

公益財団法人　福武教育文化振興財団

〒700-0807　岡山市北区南方3-7-17
株式会社ベネッセコーポレーション本社3F

TEL 086-221-5254　FAX 086-232-3190
URL http://www.fukutake.or.jp/
E-mail eczaidan@fukutake.or.jp

制作：
株式会社 吉備人

デザイン：
田中雄一郎（QUA DESIGN style）

印刷：
広和印刷株式会社

FUKUTAKE EDUCATION AND CULTURE FOUNDATION

人づくり、地域づくりを応援します

公益財団法人 福武教育文化振興財団